SDGs から考える
バスフィッシングの今後の在り方

ブラックバスはその肉食性と旺盛な食欲から生態系への影響が懸念されているが、駆除を行うための資金や人員の不足などにより駆除が上手く機能していないのが現状である。近年、SDGs という言葉を見聞きすることが多くなったが、バスフィッシングと SDGs は密接に関係しており、ブラックバスによる生態系への影響や、水辺環境に影響を及ぼす釣り人らによるごみ問題などといった課題がある。ブラックバス＝「悪」というような認識を持っている人も少なからずいると思う。確かにブラックバスは日本の生態系を脅かしている存在であるが、この影響でバスフィッシングが持つ経済効果や観光資源としての価値というものがあまり世間に知られていないのではないかと考えている。そこで本論文では、ブラックバスとの共生という点に着目し、ブラックバス、バスフィッシングに関連する SDGs の 3 つの目標と 3 つのターゲットを取り上げ、バスフィッシングの今後の在り方について観光資源や環境問題など様々な視点から考察を行った。ブラックバスが日本に移入されたことによって、日本各地でブラックバスによる大量の在来種の捕食が起っており、在来魚類が激減していたことが分かった。日本各地でブラックバスの駆除活動が行われてきたが、早期発見に至らず繁殖してしまった水域での駆除活動の成功例は少なく、多大なコストや労力もかかり根絶はきわめて困難であったことから侵入の早期発見、早期の駆除活動が重要であると考えられる。バスフィッシングにおいては、釣り人らによるマナー問題、根掛かりによる環境への問題が大きな課題としてあることが分かった。山梨県の河口湖では遊漁料に加えて湖沼周辺の整備費用を釣り人から徴収するために遊漁税を導入しており、遊漁料や遊漁税による収入や釣り人が釣り場に来ることによる釣り場周辺での経済効果は大きく、ブラックバスを観光資源として活用している自治体があることも分かった。しかしながら、ブラックバスがもたらす在来生物への影響やバスフィッシングにおける釣り人のマナー問題によって引き起こされる環境問題は無視できるものではない。ブラックバスの駆除や釣り場周辺の整備などには多くのコストがかかることから今後バスフィッシングが行われ続けていくには遊漁税のような制度を他の釣り場でも活用していく必要があるのではないかと考える。